

園池公致論

——白樺派作家論のうち——

紅野敏郎

卒直にいつて園池公致は、いわゆる功成り名とげた文学者のたぐいには入らない。かれの属した「白樺」出身の大部分の人々が、功成り名とげたのに比べて、こんにちかれの存在は、ほとんど忘れ去られたにちかい。「白樺」発足時の、スターチングメンバーの一員として、かろうじて文学史に出てくるくらいであり、白樺派の作家としてのかれの名を思い浮かべるにはかなりの時間を要するかも知れない。同じ「白樺」グループでも、大成こそしなかったが、郡虎彦のようなユニークな存在もあった。その郡ならば、たとえ三島由紀夫のような伝説的なひいき客も時として現われるのだが、園池公致に関しては、まづもってそういうひいき客も望めないであろう。そのような影の薄い園池であったかも知れぬが、わたくしは、「白樺」派にとつて園池の存在はそれなりにたいへん貴重であったと思っている。それはひいき客としていうのではなしに、「白樺」派の文学運動の全円的な考察的確におこなおうとする時、郡などとともにどうしても組上にのぼってくるのである。「白樺」派全体の展望のなかで、園池のような存在を、もうすこしまとみに位置づける必要があるはしないかと

痛感しているが故に、あえて強調してみたいと思つてゐる。

わたくしはいま今年の五月、椿山荘で開かれた武者小路実篤の喜寿の会の風景を思ひかえてゐる。会場の中央にしつらえられた武者小路の席の周りには、志賀直哉をはじめ、安部能成・小泉信三・小宮豊隆・中川一政・佐藤春夫・室生犀星などいづれもその道の大成者が集まつてゐた。会は亀井勝一郎の司会で進行していったのだが、武者小路の席の隣りのテーブルに、志賀夫人や網野菊らにまじつて、小柄でいかにも潔癖そうな園池公致の謙虚な顔がみえた。「白樺」出身のメンバーとしては、ちよつと折あしく柳宗悦の死去のあとだったし、長与善郎も病臥中のことだったし、里見淳も所用のためか来ていなかった。じつをいうとわたくしは、そこで武者小路をとりまく全「白樺」の会合をかつてに予想したりもしてゐたのだつた。その思いは残念ながら達せられなかったのだが、そのかわり志賀夫妻や武者小路と談笑してゐた園池公致の地味な存在にいまさらのように非常に強くひきつけられた。亀井もそういうふうを感じてか、つぎつぎにあつたテーブルスピーチのあと、最後の「武者万歳」の音頭を、園池に依頼し

た。それはいかにもふさわしい依頼であった。たしか岩淵兵七郎に聞いた話であったか、椿貞雄の葬式の時も園池の律気な姿がみえ、長与がたいへん喜び、その帰途あたたかくいたわりあったという。こういう話をここにもちだしたのはほかでもない。園池公致は昭和初期ごろから創作活動こそほとんどしなくなつたが、「白樺」派の完全な脱著者となつたわけではない、ということを確認したかつたわけだ。むしろ「白樺」の「地の塩」的存在、そう誇つていいような部分をじゅうぶんに持つていた。まさしくそういう存在が園池公致だ、といつていいように思う。スターチングメンバーの重要な一人である正親町公和も、園池とはほぼ相似た存在だと思ふが、かれは大正初頭にすでに他に転進している。その転じ方も文学芸術の領域から相当遠く離れてしまつた。後半は文学者としての正親町の片鱗などほとんどみられなかつたようだ。したがつて、「白樺」とともに終始誠実に歩み、こんにちもなお「白樺」人であるという誇りは、園池の方にいっそう強く残つてゐるはずである。

園池の文学的出發は、里見弴らと組んで発行した回覧雑誌「麦」の時代からはじまるとみていい。もちろん「麦」は兄貴分の武者小路や志賀たちの回覧雑誌「望野」の刺激を受けて出されたもので、もともと仲間うちのものに回覧するという習作的性格のものゆえ、正式の文学的出發とはいいがたいふしがある。しかし、「白樺」派の運動を云々する場合、通常「回覧雑誌時代」といわれるその前史的段階が、いかに重要であるかは、こんにち周知の事実

でもある。武者小路や志賀たちの例でもわかるように、その前史的段階において、将来の可能性のすべては、ほぼ間違ひなく予見できる。園池の場合もかれらとさしてちがいはない。こんにちかろうじて残つた回覧雑誌「麦」批評集をみると、やはり里見弴について園池は相当量の仕事をしていた状況がうかがわれる。ただし、進学も思うままにならなかつたという性来の病弱のため、たとえば正親町公和の弟の実慶(日下稔)などに比べ、いかにもかほそく要領のわるい仕事のしぶりのように思われる。園池には、おそらく小器用なところ、小利口なところなどほとんどみいだせないといつていい。小説そのものよりも、療養先ともなつていた神戸とか、好きだつた京都からの通信が多く、また正親町実慶などから、平面的、直線的な文章だなどと批判されたりもしている。里見弴のように、小説に、翻訳に、感想に、八面六臂、思う存分あばれまわつてゐる、というふうなところももちろんない。そうじて、むらがなくつつましかである。相当量の仕事をしていたにかかわらず、里見や正親町実慶のかげにかくれて、いわばあまり人目につかぬ存在となつてゐる。この回覧雑誌「麦」の時代は、卒直にいつて、園池にとつては、文字通りの習作時代で、才能のみごとな開花などいまだ認めがたい、といつていいであらう。にもかかわらず、この回覧雑誌「麦」は、やはり園池にとつて大切なものをはぐくみ育ててくれた温床であつた。特定の師に就き、特定のグループに拠つての文壇的修業というのではなく、まことにあつげらんとした素人の回覧雑誌「麦」の雰囲気は、かれらおのがじしの個性伸長の場としてまさに恰好のものであつた。

「麦」から「白樺」への移行地点で、「麦」同人はなんにんかの落伍者を出した。「望野」や「桃園」の方は、同人すべてが「白樺」にそのまま移行したのだが、「麦」の場合、具体的には、里見淳・児島喜久雄・園池公致・正親町実慶・田中雨村の五人が「白樺」創刊に参加し、中村貫之・菅田敏光の二人が参加しなかった。「望野」や「桃園」のように、なぜ全員参加をしなかったか、そのかんの事情はつまびらかではない。しかしながら「白樺」の場合、おそらく同人審査といったようなことはなかったと思われる。もともと工科出身の菅田や、のち銀行家となった中村のことゆえ、みずから将来のことも考え、自発的に退いたものと思われる。「麦」の正親町実慶や田中雨村、「望野」の正親町公和などは、創刊当初、いちおうの活躍はしていたが、明治末から大正初頭にかけて、あいづらいで転進した。「桃園」の郡虎彦も大正初頭には海外へ去った。「麦」のころから病弱で、しかもめだたなかつた園池は、そういういくにんかの移動を目撃しつつも、終始「白樺」と歩みをともにしていった。郡虎彦が海外で死んだ直後、さっそく遺稿集を出そうと奔走したのもかれとかれの弟の園池公功であった。郡の遺稿集についての訴えを、かれは「不二」（大正一四年五月）の六号雑誌にも書いたが、この企ては時期があたかも円本全盛期にさしかかっていたため、書肆との条件が一致せず停頓してしまった。やがて十数年後、「白樺」同人の手で、こんにも見るような豪華な三巻本の『郡虎彦全集』を出すに至ったのだが、これとて最初の、縁の下の功労者である園池の名を忘れるわけにはいかない。

ところで、園池自身は一冊の創作集をもこんにちに至るまで持っていない。正親町公和や実慶にも創作集がないのだが、かれらの場合には、まだしもがまんができる。園池の場合、なんとしても一冊の創作集は欲しかった。もつとも、大正末期に刊行された『人類の本』シリーズ（志賀の『真鶴』、長与の『或る社会主義者』、千家の『冬晴れ』など）の予告のなかに、『園池公致短篇集』が近刊となっているが、これは実際はでなかった。同様に『木村莊太小説集』、『長島豊太郎短篇集』なども、近刊となっているのみで、でなかったたぐいだいが、じつはこういう種類のものをこそだしておいて欲しかったと思う。

整理の都合上、いまここに園池の発表した作品の一覧表をかかげおこう。

「薬局」（白樺）明治四三年七月・「勘当」（白樺）明治四三年九月・「鏡」（白樺）明治四三年一二月・「赴任」（白樺）明治四四年一月・「一年のうち」（白樺）明治四四年三月・「船室の女」（白樺）明治四四年七月・「得意先」（白樺）明治四四年十月・「遁走」（白樺）明治四五年一月・「驢馬」（白樺）明治四五年二月・「匍匐」（白樺）明治四五年三月・「幻影」（白樺）明治四五年四月・「仇浪」（白樺）大正元年九月（繫惠州の名前）・「清一の手紙」（白樺）大正元年一月・「熱病患者」（白樺）大正元年二月・「失策ののち」（白樺）大正二年一月・「一日千秋」（朱纒）大正二年三月・「清一と神経衰弱」（白樺）大正二年十月・「二ヶ年の終り」（白樺）大正三年一月。

「ある人」(白樺) 大正三年二月・「四月の手紙」(白樺) 大正三年四月・「結婚する妹とその兄」(白樺) 大正三年十月・「借家と下婢」(白樺) 大正四年三月・「一人角力」(白樺) 大正八年四月・「ある良人の手紙」(白樺) 大正八年一一・一二合併号・「祖父」(新潮) 大正九年一月・「懐胎」(解放) 大正九年四月・「捨犬」(白樺) 大正十年二月・「停車場で書かれた遺書」(白樺) 大正一一年一月・「牧師の客」(白樺) 大正一一年三月・「枯木に春」(女性改造) 大正一二年一月・「慈善事業」(サデー毎日) 大正一二年一月・「泣き笑ひ」(女性) 大正一二年四月・「松三郎の不安」(女性) 大正一二年四月・「香奩」(不二) 大正十三年四月・「礼記」(婦人公論) 大正一四年五月・「重荷」(大調和) 昭和二年四月

このほか、「白樺」時代の「梗概」(明治四三年五月)、「滞欧記念展覧会日記」(明治四三年八月)、「低級批評」(明治四四年六月)、「京都より」(大正二年五月)をはじめ、諸種の六号雑誌のたぐい、「不二」時代の「菅野二十一事郡虎彦の事」(大正一三年一月)、「木下君の追憶記」(大正一四年四月)もあるいは、戦後、ままた執筆した「心」誌上の回想ものなどが、ほぼそのすべてであらう。

この一覧表をみてもわかるように、かれの執筆活動の領域は、大半がホームグラウンドの「白樺」ならびにその延長線上の諸誌に集中している。時として「新潮」や「解放」や一、二の女性雑誌にも及んでいるが、それも大正後半の一時期に限られている。その活動期間の特色は、通常「白樺」派の第一期といわれている明

治末から大正初頭にかけての期間に、とくに作品数が多く、いわゆる「白樺」派の全盛期ともいうべき人道主義時代には、奇妙なことには作品が一編もなく、やがて「白樺」十周年記念号あたりをさかいにしてふたたび創作意欲がわいてきたらしいが、それもとりたてて猛烈にというわけではなく、ぼつぼつ継続的に数年間、いくらかづつの作品をものしている、というような状況がみられる。しかもかれがつねに病弱であったということもわざわざいしてか、長編小説は一編もなく、すべて短編である。「体の丈夫でない彼に沢山の創作は出来なかった。短い一つのものにも可なり の労力を費した。けれど一つでも書き上げる毎に一步を進めたような気がして居た」とはいつているが、それも志賀のようにほとんが珠玉のような短編とはどうしてもいいがたい。したがって、どうひいきみにみても、力量ゆたかな、エネルギーな作家だとは思われぬ。その点「白樺」誌上をわが家同然に思い、毎号欠かさずといってもいいくらい奔放に書きまくった武者小路や、内からあふれでるままに長いものをつぎつぎ書きこんでいった長手とか、小泉鉄などは、たいへん異っている。しかしながら、わたたくしは、そういう不利な要素を数多く持った園池であったにもかかわらず、あのかまびすしかった人道主義時代に、かれはかれ流につつましく沈黙したことと、そのあと、十周年記念号に「一人角力」というみごとな佳作を発表したことで、園池独自の存在をじゅうぶんに評価し、認めたいと思うのである。

園池は「白樺」創刊号の「発刊に際して」という六号記事のなかでは、つぎのように発言している。

「永遠に自分の原稿は載る事がないかも知れない、情趣湧き来って筆をとる時、肉体はいつも自分を妨げて思い半にして筆を擱かしむる、偶々編なるも肉体に繋かれたるの情は偏して之を公にするの自信を欠かしめ然も事に努力するを免されずして遂に会心の文字を為すに至らず、同人と互して同人の趣味に生くる事能はざる次第である。時あり肉体の束縛から放たるゝ事あらば自分は白樺紙上に活躍せん事を夢想する者である」

創刊にあたってのこととしては、まことに意気があがらぬことおびたらしいものだ。同じところで、武者小路は、その発刊のいきさつをのべ、「気まぐれ」にできたものでも、「月足らず」にできたものではない旨を、しかと書きおいたし、柳宗悦は、外からのよせ集まりでなく、内から集ったものの強みとして、「一つの脈路ある共通点」を誇り、同時に「十人十色」の個性主義を昂然といひはなったりした。武者小路が先頭になつて進むなら、さしずめ園池は、一番あとから自分の肉体になつとくさせつつ、のこのこ歩んでいったようなところがある。

そういう園池ではあったが、有島壬生馬と南蕉造の「滞欧記念展覧会日記」などという六号雑記になると、魚が水を得たように、ユーモラスに、しかも記録という点を考慮して正確に書きとめたりもする。この展覧会は「白樺」にとつて最初の公開展覧会であったのだから、この園池の記録はかけがえのない価値を持つものとなった。園池にはこういふきちようめんさんと同時に、即興の才能が、時として湧出することがあった。

「五日、朝、剣声鏗然として『其筋』来る、武者事務所より出で、挨拶をして居る暇に里見裏口より駢りてコランと有島の裸体画を裏がえす、間一髪を容れず、警部の如きものと背広の役人入り来り、何故裏がえしましたと云ふ、……」

この裸体画の処置についての「其筋」との折衝もたくまずして快適に描き出されている。本多秋五氏の紹介によつて、すでによく知られている園池と森鷗外との偶然の出あいの場面も、園池が他の同人たちにユーモラスに話したことによつて、正親町公和の手で、書きとめられたのだ。

初期の「白樺」では、園池はむしろそのような六号雑記の部分ですこぶる精彩を放っていたといえる。かれの創作は、だいたいにおいて渾然としたまことに欠けるところが多かった。時として園池は自信をまったく喪失してしまひそうにもなる。たとえは「葡萄」という小説のなかでは、主人公の自分は、とうてい文学ではやっていけない気がして、あれこれと思ひ悩むさまが描かれている。「自分が筆を執るのは自分の道でない道を歩こうとするので、実は間違つた努力をして居るのではないだろうか」という不安がたえずおこるのである。そういう不安が生じた時、思ひたつて友人の宅へ行き、ともに語らい、ゴッホやロートレークの絵などをみては、だんだん興奮してきて、自分も一生懸命にならなくてはと思ひ、そう思えば落ちついていられなくなつて、また自分の家にとつてかえす。友人や絵画がつねに不安・焦燥の回復剤として活用されている。こういう状況は、「白樺」初期では、どの同人といわず、だれしも体験しているようだが、園池の場合、

病弱とあいまって、十全の回復剤とならず、しばらくするとその不安は加速度的に濃くなっていく。「二ヶ年の終り」という作品では、素朴に、あの大切な友人すら信じられぬところまで進んでいく。この作品の書かれた大正三年という地点では、すでに「白樺」当初のメンバー自体にかなりの移動があった。「白樺」主流派とでもいうべき武者小路・長与・岸田劉生・千家元磨らの直線的な結合、それにおのれの才能の問題などもからみあって、きっぱりと転進するもの、傍観するもの、自己のみの身辺整理にいそしむものなど、同人のあいだに多少の疎隔が生じた。「白樺」のひとつかたまりのグループというよりは、「白樺」出身の独立者として、おのかじしの道をきりひらいていかねばならぬような状況に追いつめられていた。そういうなかで、園池は、園池なりに相当悩んだようだ。「努力主義」といいにくいようなつとめかたをしたが、「身の程も知らず漢掻いて居る」とみじめそうに批評する友もいたという。それぞれ創作集を出していく友（志賀の『留女』をはじめ、一連の『白樺叢書』が洛陽堂から刊行され、いずれも好評を博していた）をみて、たまたまなく焦燥の念にかられたことと思われる。かれは友達に逢おうと思わず、友達の自信のあることばが今はいかにまったく別なものに響いた。かれは友達からなんらの友情を払ふにも値しないものに扱われているように思ったりする。「二ヶ年の終り」の結末のところは、

「彼れに対する友達の一寸した事にも、彼れには円滑に笑えなかつた。彼れは一々友達を憎むだ。

ある晩彼れは床の上に横になると同時に、『繋つぞ!』と頭

の中で叫んだ。彼れはピストルを握って友達を繋つ事を考へて居たのだ。そして自分も自殺してしまうのだ。」

というような妄想にまでつっぱしってしまった。もちろんこれは「白樺」流の自己小説の一つとみていいものだから、園池自身の迷妄とそんなにちがいはないはずだ。園池に強く襲った危機の態をわれわれはここにしかとかいみまることができると。このあたりへくると「白樺」の六号も、ほとんど武者小路や長与、小泉や柳の執筆ばかりがめだち、ごく初期にあった胎蕩たる編集室の雰囲気がいづのまにかなくなっていつにに気がつく。

さすがに園池は徹底的にデスペレートにはなり得ず、彷徨しつつも自分の創作をおしすすめるよりほかに自分を救う途がないことを悟るのだが、やはり志賀のような、離れてしかも強く即く、という豪邁なリズムは、どうしても無理であった。しかし園池なりのリズムをたえず響かせようとした。

人道主義時代における園池の沈黙は、「白樺」の十人十色主義の端的なあらわれであり、園池にとっては、志賀の「尾の道」時代に匹敵するような日々であったと思われる。友を離れて、ひとりたつ、孤独に堪える、という真摯ないとんがたえすおこなわれたであろうと推察される。ある意味においては、木下利玄の自己樹立のありようと、ゆくりなくもふれあうところだ。

里見を除くほとんどのメンバーが顔をそろえた十周年記念号に、園池は「一人角力」という作品をひさびさに発表した。やはりこれも「白樺」流の自己小説に属するもので、武者小路夫妻・志賀夫妻と思える人物も登場する。園池の縁談にまつわる話を淡

々と描いたものだ。いらだたしげなかつての園池の姿は消えて、つつましい生活をともかく第一に考えようとする人間に変わっている。なによりも芸術を優先させたすぐれた芸術家の存在を知っているが、自分はそういう芸術を持っておらず、自分の文学はいつおしまいになるか自信がなく、その時の要心のために、結婚ししておく方が安心だ、という気持などをいだいたりする。思いあがった文学者づらといったところがまったくみられない。野心も覇気もほとんどない。その点物足らぬところがあるかも知れぬ。しかしここに前期の園池になかった落ちつきがはつきりうかがえる。従来、園池の作品は、真正面から文芸時評の対象にとりあげられたことはすくなかった。この「一人角力」も多くの人人からとくに着目されたというわけではない。ところが、ほかならぬ広津和郎が、この作品を激賞した。例の有名な「志賀直哉論」を書いた直後のことで、『作者の感想』のなかにも収録されているが、ことこのついでにその激賞ぶりを引用しておく。広津は、いままで園池の作品は数年前に一・二編読んだことはあったが、はつきりした記憶が残っていなかったらしい。たしかに園池の初期の作品には、志賀などの作品と異り、一度読んだらいつまでもその印象が鮮かに残っている、というふうになっていない。ところでこの「一人角力」はまさしくしみじみと心に残ったという。

『一人角力』は淋しい、しづかな、清らかな、しみじみした作である。静かな谷の岩清水のほとりを、かさこそとささ蟹が這って行くやうなデリケートなリズムがある。何事も主張してはゐない。人生に対する何の意見もとなへてはゐない。

けれども、少しのアテ気もなく、自分の淋しい姿を、しづかに見守ってゐる人の品位がある。誰を恨むでもない。自分に与へられたものの淋しさを、こんなに素直に、こんなに謙遜に見守って、そしてそれをいとほしんでゐる美しい心を、私は見た事がない。そして而もかうした謙遜を持つ人が、ややともすると陥る人生の認識不足と云ふやうな不明な点はない。飽くまでも聰明で、心眼が透徹してゐる。澄み切つてゐる。長い年月を要した修養(ある種の)の結果の光沢がある。平凡のやうで、決して平凡でない。形式もつつましかでありながら、頗る自由で、そして清新である。

そしてやはり日本人でなければ生み得ない芸術だと云ふ気がする。外国にはこんなものは生れないだろうと思ふ。響は高くないが、人の魂をしづかに捉へて行く独特のものがある。——多くの作を望めないかも知れないが、園池氏の努力を心から希望して止まない。

広津にしては珍らしいくらいに全面賛美である。志賀直哉に対してすら、「鋭い理智と正しきものを愛する情熱に燃えた心」を称揚しつつも、「好人物の好運でないもの」をみせてくれるよう、ふたたび外に向つてその眼を見開くよう、心から要請したので、ここにはそういうたぐいの要請すらない。この広津の「一人角力」評は、正直にいつてやや過褒に属するだろうが、あえてちやうちん持ちをする広津でもあるまいし、園池に迎合する必要などさらになかったはずだ。とすればやはり広津のあたたかい好意にみちた端的な発言と文字通り受けとつてよからう。そうしてみる

と、この「一人角力」は園池の真正正銘の文学開眼の作品ということができよう。それにしても他の同人たちの激烈な進出ぶり、いちはやい成熟ぶり、あるいは、ほどのよい見きりに対して、なんとというテンポののろさであったことか。もっぱら晩稲を自称した長手よりも、じつは園池の方が晩稲であった。しかしそこに、人のつくったルールではなしに、自分の道をさがしさがし努めた園池の、やはり「白樺」派の人らしい生き方があった。「一人角力」で示したような心境からいえば、爪先だった姿勢で、芸術家の仲間入を強いてする必要がなかった。病弱な自分にふさわしい、無理のない姿勢で、淡々と作品がつくれる時にのみつくっていけばよいのである。しかしながら、大正後半の時代は、そういう姿勢の作家をとくに喜び迎へはしなかった。「一人角力」を發表した翌年には、日本社会主義同盟の創立大会が警官のものものしい警戒のもとで行われている。それには、秋田雨雀や藤森成吉などの有島武郎の周辺の作家も参加した。さらに大正十年の初頭には、秋田版の「種蒔く人」が発刊されている。かつて、武者小路の影響下にあった金子洋文が、武者小路との別れをここでやっている。「白樺」そのものが、いつのまにか時代の嵐にとりのこされるようなかっこうともなっていた。しかし、「白樺」廃刊後も園池は、たとえば「礼記」というような質の高い作品も書いている。これは鎌倉に住んで数年にもなる主人公が、鎌倉のいやらしさをかなり神経質につき出した作品である。それは第一次大戦中出现した成金の別荘人種の持っている軽薄さをつつく

と同時に、もともとから鎌倉に住んでいた土着人種のいやらしさにも、主人公は思わず反撥していく。昨年の春、浅見淵氏は「忘れられた作家たち」(「群像」)という一文を書かれた。これは百巻を前後するほど龐大な明治・大正・昭和の文学全集の類のなかに、時にこみとして編みこまれている『大正小説集』とか『昭和小説集』なるものに対して発せられた具体的な要望であった。この種の全集には、漱石・鷗外というような大作家に対する遇し方よりも、こういう小説家たち、いまは忘れられたような作家たちをどのように遇するかで、また別種の特徴が出てくるというものだ。そこで前記の浅見氏の一文は、大正文学や昭和初頭の作品で、全集のそれらの巻に収録されてもいい作品なのに、いまだにどの全集にも取上げられていないものを、いくつか思いつくままだならべておられる。そのまっさきに園池公致が出てくる。ついで三宅幾三郎・関口次郎や、大衆小説を書かない前の小島政二郎や木村庄三郎、白石実三や福永挽歌、あるいは、佐々三雄や古木鉄太郎、こういう人々が出てくる。わたくしもそれらの人々の二三の作品が、たとえば現在刊行中の講談社版のものに収録されることを強く望む。それらの人々以外に、『菜園の外』などを書いた舟木重信も加えたい。園池はそれらの人々にまじって、「気品と滋味」をもった、「フィイブルな」作家という特色をいかに強く發揮するであろう。武者小路ですら沈黙を余儀なくされた昭和初頭の嵐のなかでは、病弱な園池が創作活動を持續できなかったのも無理からぬことと思う。